

---

# 教育総合センター だより

---

NO. 170

令和 5. 12. 1

---



## 「わかることとわからないことの間で」

尼崎市立塚口中学校  
校長 深澤 慶子

1人でプラハに旅をした時、怖い思いをしたことがある。夕方、ホテルに帰ろうとしたら、昨日までの閑静な住宅街に大勢の人が集まり、何やら大声で叫んでいる。大きなスクリーンがいくつも設置され、何台もの戦車が町を走り、人々に発砲する様子が映し出されていた。どの道の広場にも老若男女が集まり、同じ光景が繰り返られていた。チェコ語は一言もわからないため、状況がわからず、ホテルにも帰れず、ただひたすら心細く、怖かった。

2008年8月20日。その日は「プラハの春」の弾圧から40年目に当たるということで、ロシアのジョージア侵攻に対する大規模な抗議集会が行われたことを、ようやくホテルに戻ることができて、知った。

周りで起こっていることや語られる言葉が理解できないことは怖いし不安だ。

宮口幸治氏の著書「『立方体が描けない子』の学力を伸ばす」(PHP新書)に、課題を教えてもできない少年に「どうしてわからないのかな」と何度も言って泣かしてしまったというエピソードが載っていた。私も同じようなことをしてしまったことがある。わかることの喜びを教えたいと言いながら、その子にとっては理解できないことをたくさん押しつけ、怖い思いをさせたのだと思うと、申し訳なさでいっぱいになる。

ユグトレは認知機能の弱い子どもにとっては有効だ。しかし、学校には学習指導要領に則

って教えなければならないことがたくさんある。

今、現場の教員はわかりやすい授業をするために「授業デザイン 3つの視点」を用いて指導計画を練ったり、タブレットを活用したり、様々な工夫をしている。また、協力することの大切さや喜び、達成感が得られるようにと行事を企画している。時間を割いて子どもたちと話し、良い学級や人間関係づくりに心を砕く。不登校や保護者対応等、やるべきことは山積みだ。そんな中、子どもたちが力をつけられるようにと考え、綱渡りのように日々の取組を行っているのだ。

AIの進化は著しく、ウクライナやガザ等、世界はきな臭い。このような時代を渡っていく子どもたちの「生きる力」とは何なのか。戦車で人を蹴散らすように人を黙らせることではないはずだ。自分の考えをきちんと伝えつつ、相手の話も正しく聞けること。うまくいなくても立ち直るレジリエンス。多角的に物事を見て考える力。困っている人を助けようとする気持ち。協力して物事をやり遂げる力。そんな力を子どもたちにつけるためには教員にもゆとりや連携、心理的安全性が必要だと思う。

でも、絶対的な正解はなく、未来は見えない。人は1人では非力だ。だからこそ、子どもたちや先生たちが少しでも安心して過ごせる道と一緒にさがしていきたいと願う。チェコの人々が国を超えて共感と連帯を示したように。

# ☆☆尼崎市スマホサミット 2023 報告☆☆

## 1. 目的

SNSをはじめとするインターネット上のトラブルやいじめなど、たくさんの事案が子どもたちの身近で起こっています。そこで、情報モラル向上支援事業の一環として、尼崎市内の学校に通う児童生徒がスマートフォン等の使用にかかわるルールづくりに関して、校種の枠をこえ、大人とともに考え、取組の輪を広げることを目的として、実施しました。

## 2. 概要

日時 8月22日(火) 10時～15時  
会場 尼崎双星高等学校  
参加校 立花南小学校、園和北小学校、大庄北中学校、園田中学校、尼崎高等学校、尼崎双星高等学校  
出席者 兵庫県立大学 竹内和雄 教授  
(一般社団法人ソーシャルメディア研究会)  
松本市長、白畑教育長など

学校の枠を超えて、また、PTAや教員などを交えて大変熱心な話し合いが行われました。児童生徒は、スマホ利用のルールについては「大人と一緒に話し合って決めたい」、タブレットのより有効な使い方については「フィルタリングの制限を緩くして、調べ学習に活用しやすくしてほしい。」等の意見を出し合いまとめました。

## 3. サミットの様子



感想の発表



## 4. 感想

(小学生) 色々な年齢の人と話し、考えも広まり、色々な考えが出て面白かったです。スマホを買ったら家族でルールを決めたいです。

(中学生) 参加したことでスマホについて考えられたし、実際に企業の人などに会って学校で使っているタブレットについて改善してほしいところなどを伝えられたので良かったです。これから、生徒会がスマホサミットで学んだことや知ったことを生徒に伝えるために全校集会でスライドを作って発表したり、生徒会新聞で感想を書いたりしたいと思います。ありがとうございました。

(高校生) スマホによる影響で発生する課題をそれぞれの目線で議論することで、視野を広げることができました。これから発展していくインターネット社会に適応しやすくなると思いました。このような機会がもっと増えたらいいなと感じました。

## 5. 終わりに

令和2年度から、情報モラル向上支援事業として、市立の小・中・高等学校に支援員を派遣して出前授業を実施しています。児童生徒が自らスマートフォンなどのルール作りを検討することで正しい利用について主体的に学びを深めることを目的に実施しています。スマホサミットは、同事業の一環として開催するもので、今年度も参加校が一堂に会して、校種を越えて活発な意見交換ができ各校での取組に繋がりました。今後は、スマホサミットで交流し、考えたことを参加校の取組だけでなく、市内全体に啓発できるように繋げていきたいと考えています。

(いじめ防止生徒指導担当  
指導主事 佐野竜也)

## ☆☆☆人権週間に際して☆☆☆

12月10日は世界人権宣言が採択された日であり、国際連合において「人権デー」と定められました。日本では、この12月10日を最終日とした1週間を「人権週間」と定め、全国的に人権啓発活動や催しが行われています。

法務省では、「啓発活動強調事項」として17項目を設定していますが、それとともに「啓発活動重点目標～人権啓発キャッチコピー～」として、今年度も昨年度から引き続き、「『誰か』のことじゃない」としています。

いじめや体罰・虐待など、子どもが被害者となる事案が後を絶たず、子どもの人権をめぐる状況は一層深刻化しています。

また、インターネット上での誹謗中傷や差別を助長するような情報の発信により、深刻な被害を招くなど、情報化が急速に進む現代社会においては、いつ、どこで、誰の身にも起こりうる大きな社会問題となっています。

さらには、性的マイノリティをはじめとするマイノリティについても、偏見や差別の解消に向けて取り組んでいく必要があります。

今年度、人権教育担当となり、人権についての研修やフォーラムなどに参加するなど、

改めて「人権教育」「人権課題」に触れる機会が増えました。そして「『誰か』のことじゃない」という短いことばの中にある、人権課題を自分や自分の身近な人の問題として捉えるということが、人権課題の解決に向けた最初の一步になるものだと強く感じています。

子どもたちに人権尊重の理念に対する理解を深め、生命の尊厳を基盤に、自他に対する肯定的な態度と、共生社会の実現に主体的に取り組む実践力の育成が求められています。教育委員会といたしましても、児童生徒が、自他の生命や人格を尊重する心を育むとともに、法やきまりの意義を理解し、遵守する規範意識の育成に重点を置いた「こころの教育」を推進しています。

また、外国人児童生徒が増加する中、母語を理解できる支援員を派遣し、日本語支援および言語の障壁による心のケアに取り組むとともに、学校園では全ての子どもたちが、国籍や民族等の「違い」を認め合い、多様な文化的背景をもつ人々と豊かに共生する心、共に生きようとする態度や意欲を育んでいます。

多くの人権課題が身近なところに存在する現在、最初の一步をより多くの人々がふみ出すことにより、多様性が尊重され、すべての人々がお互いの人権や尊厳を大切にし、生き生きとした人生を享受できる共生社会の実現を目指していく、そのような人権教育を推進していきたいと考えています。

(学校教育課 指導主事 清長 幸治)



## 教育情報コーナーのお知らせ

### ☆教育情報コーナーのご案内

教育情報コーナーでは、先生方に利用していただきたい本や資料、雑誌等を整備しています。また、必要な図書、資料等のご相談にも応じております。お気軽にお尋ね下さい。

(3F 教育情報コーナー)

#### 【新着図書】

- ・『「見取り」と「評価」がゼロからわかるスクールフィードバック入門』  
佐々木紀人 著／明治図書出版
- ・『「ヤングケアラー」とは誰か 家族を“気づかう”子どもたちの孤立』  
村上靖彦 著／朝日新聞出版
- ・『子どもの自己成長力を育てる 「自分づくり」を支える授業実践』  
田中博之 著／金子書房
- ・『発達「障害」でなくなる日』  
朝日新聞取材班 編／朝日新聞出版
- ・『教師という接客業』  
齋藤浩 著／草思社
- ・『「学校」ってなんだ？ 不登校について知る本』  
伊藤美奈子 監修／Gakken
- ・『すべての子どもの権利を実現するインクルーシブ保育へ』  
芦澤清音 他編著／ひとなる書房
- ・『GIGAにとどまる学校、学校DXに進化する学校』 平井聡一郎 編／教育開発研究所  
(担当 松浦)

### ☆「ひと咲きタワー」は、学びのタワー！

#### 【本の紹介】

■『教育書の生かし方』-読書による閃きを実践化する過程が、指導力を磨く！-東洋館出版社 2022年2月初版発行  
著者 松村 英治：東京都大田区立松仙小学校主任教諭。東京大学大学院教育学研究科にて、秋田喜代美先生に師事、修士(教育学)。校内では研究主任や特別活動主任を歴任。授業改善と特別活動の充実に邁進中。国立教育政策研究所「評価基準、評価方法等の工夫改善に関する調査研究(R1小学校生活)」協力者。主な著書に『教師のマルチタスク思考法』(東洋館出版社)他多数

「趣味は読書、でも飽き性」と自認する著者が、同時並行での多読で積み上げた教育書のエキスを紹介している本。様々な分野にまたがっているだけでなく、著者が読書以上に大事と言っている「課題意識」と「閃きを実践化するメンタリティー」で実践化した内容が紹介されており、興味のあるところからでも読める本である。

■『発達障害の人には世界がどう見えるのか』 SB新書 2022年12月初版発行

著者 井手 正和：国立障害者リハビリテーションセンター研究所脳機能系障害研究部研究員。立教大学大学院現代心理学研究科博士課程後期課程修了。博士(心理学)。専門は実験心理学、認知神経科学。学位取得後からASD者の知覚や研究を開始し、MRIによる非侵襲脳機能計測手法を取り入れることで、感覚過敏や感覚鈍麻が生起するメカニズムの解明を目指す。著書に『科学から理解する自閉スペクトラム症の感覚世界』(金子書房)がある。

実験心理学、認知神経科学の専門家である筆者が、発達障害について当事者の方々の感じ方、見え方をわかりやすく説明している。特に、様々な「ケース」を例示して、イラストや会話場面を交えて解説しているところは、読んでいて成程と思える説明である。

※教育総合センターには、すてきな本がたくさんあります。

(担当 西川)